

いじろのとも

第十五卷

二月号

いじろが枯れりや

金は繫れど

こころが枯れりや

人生砂漠が

待っている

日本の山には

緑があれば

人のこころは

荒れ果てる

自分は違つと

多くが思い

流れ流れて

死に至る

還元できない精神

医者は

うつ病は

脳の疲労による病氣

だという

医者の

精神を物質に還元する

傾向はいつまで続く

心理学者の

精神を動物に還元する

傾向と同様に

人生を考え直して

みたい人は(一一一一)

空海『即身成仏義』解説(二四)

(七) 重重帝網なるを即身と名づく

(七) - 1 即身

「重重帝網なるを即身と名づく」とは、是れ則ち譬喩を挙げて、以て諸尊の刹塵の三密、円融無礙なることを明かす。帝網とは因陀羅珠網なり。謂く、身とは我身・仏身・衆生身・是れを身と名づく。また四種の身有り、言く、自性・受用・変化・等流、是れを名づけて身と曰う。また三種有り、字・印・是れなり。是の如く等の身は、縦横重重にして、鏡中の影像と灯光の涉入との如し。彼の身、即ち是れ此の身、此の身、即ち是れ彼の身、仏身、即ち是れ衆生身、衆生身、即ち是れ仏身なり。不同にして同なり。不異にして異なり。

現代語訳(要旨)を、頼富本宏著『日本の仏教2 空海』(筑摩書房刊)から、引用させて頂きます。

* * * *

次に、「あらゆる身体が、帝釈天の持つ網のように、幾重にも重なりあいながら映しあうことを、身に即して「即身」という」という句を説明しよう。

この句は、喩(たと)えをあげて、もろもろの仏たちの国土を砕いて塵にしたほど無数にある三種の行為形態(三密)が、まどかに完全に融(と)けあい、さまたげのないことを明らかにしている。

句にある 帝網 とは、仏法を守る天部の代表である帝釈天の宮殿にはりめぐらされている宝をちりばめた網のことである。この網には、一つ一つの結び目に宝の玉がつけられており、それらがあたかも万華鏡のように、限りなく互いに映しあっているのである。

同じように、以下に説明するさまざまの身体が互いに映しあい、融合しあっているのである。

さて、次に、「即身」という語の「身」について説明しよう。

「身」には、わが身体「我身」、仏の身体「仏身」、生きとし生けるものの身体「衆生身」があり、これらを「身」と呼んでいる。

また、仏の性格を考察する立場「仏身論」から見れば、次の四種類の身がある。

まず、第一は、さとり の 当体 そのものとしての身体「自性身」、第二は、さとりを自ら享受し、かつ他人に享受せしめる身体「受用真」、第三に、人々を教化するために姿をかえて現れる身体「変化身」、第四は、救われるものと同等の姿をとって現れる身体「等流身」である。これらも、「身」と名づけることができる。

また、次の三種類の「身」がある。第一は、文字「梵字」によって表現される仏の身体、第二は、印契などの象徴物によって表現される仏の身体、第三は、姿・形をとる形像によって表現される仏の身体である。

このようなさまざまな「身」が、縦横無尽にかかわりあっていることは、たとえば、多くの鏡を向かいあわせ、その間にある物体を置くと、相互に限りなく映し合うこと、もしくは、多数の灯明をならべて置くと、互いに照らしあつて、個別の光を区別できないことと同様である。各身が相互にかかわるさまは、かの「身」は、すなわち、この「身」であり、この「身」は、かの「身」であるという関係で表現される。

同様に、仏の身体は、すなわち生きとし生けるものの身体であり、生きとし生けるものの身体は、すなわち、仏の身体にほかならない。このように、不同でありながら同一であり、不異でありながら異なるのである。

以上、第一偈の「即身偈」の第四句である「重重帝網なるを即身と名づく」という言葉の説明を終えたが、六大・四曼・三密という本質・様相・作用という三種類の要素がいずれも相応しあつて、あたかも帝網のように重々無尽に渾然一体となつた状態が即身と呼ばれるのである。

* * * * *

この現代語訳（要旨）をお読み頂ければ、お分かりのように、これまでの解説がご理解できている方には、さして難しい言葉はないように思えます。

でも、語句としては理解できても、その意味する内容は、とても深遠なものです。

偈にもありますように、我と、仏と、衆生とが、不同でありながら、同一であるとは、理屈としては、分かるものではありません。哲学者や仏教学者は、なんとか理屈を付けたがりますが、これは、どこまでも体験に基づくもので、それが無い者が説きますと、必ず間違いを犯してしまうのです。

何度も述べますように「入我我入（即身成仏）」を体験しますと、あらゆる「存在」は自分と一体である実感するのです。それは、勝手にそう思える訳で、努めてそう思おうとして、思うのではないのです。

自作詩短歌等選

母の偉大さ

情動の
共有するは
母となり
「こころ」育てる
母の偉大さ

成人が暴れる

成人は
人と成ること
意味してる
式で荒れるは
なんとしたこと

共依存

共依存
子どもの自立
疎外して
登校拒否の
原因となる

責任ある個人に育つ

子どもらに
自由与えりや
責任の
とれる大人に
なると言う
馬鹿な大人の
居るを悲しむ

夫婦仲が悪い

夫婦仲
悪けりや子ども
それなりに
曲がつて育つは
当然のこと

愛情欠乏症

愛されたい
可愛がられたい
愛されたい
可愛がられたい
愛されたい
可愛がられたい

どこまでも続く
多くの子どもの
切ない思い

そしてついに
大人に成つても
まだまだ

愛されたい
可愛がられたい

愛されたい
可愛がられたい

刹那となる

情動の
共有欠きて
自閉化し
全て刹那と
なる人多し

会社は人なり

出勤簿がなく
定年制もない
雇うのは先着順
出張精算は
クレジットカードの
利用代金明細書
役員賞与もとらなきや
グループ会社間なら
契約書もとらない

すべては善意と信頼に
基づいて経営する
なのに
世界にない物を作る
そういう中小企業がある

豊橋市

樹研工業

従業員90人

年商約30億円

会社は人なり
人は信頼なり

「子は親の鏡」

貴方の育った家庭は
どんな家庭ですか？

愛情のない家庭
緊張のある家庭
安心のない家庭
対立のある家庭
夫婦仲の悪い家庭
冷たい家庭
統制ばかりする家庭
専制主義の家庭
自由のない家庭

干渉しない家庭

共依存する家庭

甘やかされる家庭

しつけのない家庭

波風の立たない家庭

自己表現しない家庭

バラバラな家庭

暴力のある家庭

心の通じない家庭

機嫌を取らされる家庭

育つ家庭で

子どもが決まる

哀れな衆生

深き業

背負いて歩む

人生を

苦難と思えぬ

哀れな衆生

武士道とは強さなり

いま

映画や小説で

鬚物（まげもの）が

受けているのは

武士道の基本が

強さの追求であり

それに心ひかれる人々は

皆それぞれに

武士道の追求者

であるという

それは間違い

人々が自己を肥大させ

ますます他者に勝つとい

う

優越欲を満足させている

だけなのだ

自作随筆選

責任ある個人とは

一月五日(月)付け毎日新聞「論点」欄に「どこへ行く日本 2004年のこの国」と題して三人の方が意見を寄せておられました。その中の一人は建築家の安藤忠雄氏でした。その見出しは「『責任ある個人』よ育て」でした。

この見出しを見た途端に、私は、「え、本当？」と書いてしまったのです。と言いますのは、個人(主義)と責任とはあい矛盾する概念だからです。それが、「なぜなのか」の説明は、後ほどにして、まず、安藤氏の主張されることを聞いてみたいと思います。

同氏は、書き出しで、今の日本の社会状況を「責任感を欠落」させている状態、と指摘されています。その例として仕事上の事故が続出している点を挙げておられます。その一つの代表は、医療事故の続出です。人々の何者にも代えがたい命をあずかる医師、自らも傲慢に「命の重さは地球よりも思い」と言う医師が、しょっちゅう医療上のミスを犯して患者を死に至らしめるのは、なん

としたことか、というわけです。そして、次のように述べておられます。「現在の日本のさまざまな意味での国力の低下は、人間を責任ある個人として育てられない、社会構造に源があるのは間違いない。／問題は、彼ら(若者)が、文字通り自立していないことだ。」と。では、どうすれば「責任ある個人が育つのか」ですが、同氏は次のように述べておられます。

「人間の根幹は、純粹に世界を知ろうとする子供のとくに形づくられる。必要なのは、子供なりに自分で考えて、行動できる自由を与えてやることだ。自分の心を探すうちに友を知り、生命を知り、自分が戻る家庭の意味を学ぶ。自由を通じて責任の意味を身体で学ぶ。責任を伴った自由を大切にやっていけば、昨今の青少年の凶悪犯罪も起こらなかつたのではないか。」と。

一見して、もつともなご指摘なのですが、でも、とても大切な点が欠けていると思います。

それは、こうなるためには、その前提となる条件が必要なのです。その条件とは、親の「愛(子への無条件の関心)」であり、それに基づく「情動の共有」なのです。それは、私の理論で言いますと、「他己」をなすものです。

もし、こうしたものがありませんと、「行動できる自

由を与えてやれば「やるほど、実は、人間は、無責任になつていくのです。「自由を通じて責任の意味を身体で学ぶ」ことなど、到底、できるわけがないのです。

責任は、英語では responsibility です。それは、文字通りに訳しますと、応答する力です。応答とは、他者の「こころ」への反応です。

責任を感じるこころ（責任感）は、私の理論でいう、「情動の共有」を通じて養われる「人の心を感じるこころ」なのです。

安藤氏が言われる「自由に責任が伴う」のは、自分の為す行為によつて他者が何らかの迷惑（＝悪い影響）を受ける（受けた）だろうとき、その「他（者）」の「こころの痛み」を「自（分）」の「こころの痛み」とすることができからなのです。そうできるのは「人の心を感じるこころ」がお互いの「精神（他己）」の中にあるからです。それを欠くとき、人は自分の行動に責任を伴わずこと、つまり責任を感じることはできないのです。

現在の日本は、民主主義の進展によつて、人々が他己を弱めています。つまり「人の心を感じるこころ」を失いつつあるのです。なぜならば、民主主義は自己を追求する制度だからです。自分の自由とその自由を保障する平等のみを主張する制度だからです。人間社会を崩壊か

ら護り、それを維持させていくものは、自分の自由や平等を主張する中には存在しないのです。そうではなく、それは、他者のことに配慮する精神の働き（＝他己）の中にこそ存在するのです。それが、ここで問題となつています。「責任感」であつたり、「義務感」であつたりするわけです。そして、そうした他者性の根幹をなすものは、私の理論では人間だけに固有な無意識（精神の髓）に宿す「仏（の大慈大悲）や神（の愛）」なのです。それは、意識領域では信仰心と言えるものです。

日本は、世界中で極めて珍しいケースとして、信仰と宗教を否定され、民主主義のみをこころの拠り所としてきたのです。

こうした状況の中では、自由と責任は完全に矛盾する概念となつていっているのです。安藤氏は、こうした状況に言及することなくして「自由を与えて」「責任ある個人」「自立した個人」を育てるべきだとおっしゃることそのことが、実は、既に無責任な発言になつていっているのです。

前述しました医師の、自由に為す無責任な医療行為も、自分では悪をなしているという、たいした意識なしに為しているのです。行つた結果が「間違いだつたか」といった程度にしか感じていないのだと思うのです。むしろ、逆かもしれません。自分では善いことを為している（生

かす」と思つて悪を為している（死なす）のです。
では、どうすれば責任ある個人を育てることができ
のでしょうか。

そのためには、既に述べたところからお分りのよう
に「他己」そのものの働きを強める以外にはないのです。
他己を強めるためには、自由をどんどん与えるのではな
くて、与えた自由に匹敵する統制（我慢）を加えること
が必要なのです。しかし、現状の打開法として多くの方
が提案されるのは、もっともつと自由を与えて、子供を
伸び伸びとさせ、子どもにストレスを掛けないことだと
言われます。

それは、間違いだと思えます。
愛情を十分与えた上で、もっともつと統制（我慢）を
課さなければならぬのです。それは、厳正に、かつ厳
格に、規則に従わせることです。我慢しても、大人のす
る仕事を手伝わせたり、分担させたりすることです。
もっと理想的なことを言いますと、愛情を与えて、情
動の共有をしていますと、「ああしろ、こうしろ」と言
わなくても、つまり統制を加えるという意識がなくても、
勝手に子どもは、親の思う通りに、期待する通りに行動
するようになるものなのです。実は、「ああしろ、こう
しろ」と言つてするようでは、既に、教育は失敗してい

ると言えるのです。そうした、統制を加えるという意識
なしで出来る教育を、私は、「響育」と呼んでいます。
お互いに、ここを響かせ合つて育つのです。

家庭のなかで、子育てを通じて、親も育ち、子も育つ
のです。お互いにここを響かせ合い、育ち合うのです。
それが、人間関係というもののなのです。親は、子をもう
け、子を育てることで、人間としての優しさ、や「人間
としてここを触れ合わす」とはどういうことなのか、
といったことを身をもつて知ることができるのです。

しかし、いま、日本人は、太平洋戦争に負けて以後、
自由（とそれを保障する平等）ばかりを主張してしまし
たから、自由さえ十分与えていれば、子どもはちゃんと
育つと考えるようになってしまつていゝのです。信仰を
失つて、自由ばかりを与えていますと、人はますます、
個に閉じて、エゴイステックになつて行くのです。責
任感が育つどころか、逆に、責任感や規範性を失い、社
会は、だんだんと活力をなくして行きます。そして、安
藤氏が言われますように「国力の低下」を招いて、社会
は衰退に向かつて行くのです。書き出しに「どこへ行く
日本 2004年のこの国」とありましたが、いま日本
は、信仰や宗教を失い、民主主義のみを信奉して、世界
に先駆けて社会崩壊へとさえ向かつていゝのです。

釈尊のこゝろば（一三〇）

（三三七）太陽は昼にかがやき、月は夜に照らし、
武士は鎧を着てかがやき、バラモンは瞑想に専念し
てかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に
輝く。

なかなか難しい偈だと思います。それは、「バラモンは瞑想に専念してかがやく。しかしブツダはつねに威力もて昼夜に輝く」という部分です。

バラモンとは何か、につきましては昨年十一月号で出てきました。それは、仏教では、インド伝来であった単なる「祭祀（さいし）を行う人ではなく、徳を身に具現した人のこと」だということでした。

では、「瞑想に専念して輝く」「徳を身に具現したバラモン」と「つねに威力をもって昼夜輝くブツダ」では、どこが、どう違うのでしょうか。それが分からなければ、この偈は理解できないように思うのです。

かつて引用したことがあるのですが、老子は次のような趣旨の言葉を述べています。「道が廃れて、徳が起こり、徳が廃れて、仁が起こり、仁が廃れて、義が起こり、

義が廃れて礼が起こる」と（記憶で書いていますので、「章」と正確な言葉は分かりませんが）。

さて、釈尊のこの偈ですが、老子で言いますと、釈尊は、道を体得しておられたと思いますが、バラモンと呼ばれる人は、ひたすら精進（瞑想）して、徳を体得している人だと思おうのです。

道を体得するとは、仏教で言いますと、煩惱を解脱して、ニルヴァーナに達していることに当たっています。そうなりますと、今、たとえ瞑想していなくても、昼夜二十四時間にわたって、常に威力を放って、輝いているのです。それは、存在そのままが、仏（であり神）であると言えるのです。

それは、老子で言いますと、道を体得して、それ以下の徳も、仁も、義も、礼も、すべて体得している状態なのです。

ここで、「威力」という言葉が出ていますが、これは、その人のもつ雰囲気（威光・オーラ）の力によつて人に与える強い影響力ぐらいに思つて頂ければよいと思います。でも、それが、威光となるためには、それを受ける側の「他己」が問われているのです。いくら光を放つていても、それを感じるリセプター（受容器）が壊れていたり、感じるところが枯れていますと、威力は発揮され

ないこととなります。現代は、そうなっています。

(三三八八) 悪を取り除いたので バラモン (婆羅門) と呼ばれ、行いが静かにやすまっていますので 道の人 (沙門) と呼ばれる。おのれの汚れを除いたので、そのゆえに 出家者 と呼ばれる。

この偈は、テキストにしています本の中村元訳注によりますと、「くなので」と呼ばれる」という場合の、二つのくは、語源解釈的に似た音だということです。

つまり、バラモンの語源は「悪を取り除く」ということとすし、道の人(沙門)の語源は、「行いが静かにやすまっている」ということです。また、出家者の語源は、「おのれの汚れを除く」ということだというわけです。

さて、内容を検討しておきたいと思えます。まず、バラモンとは悪を取り除くということですが、悪で思い出しますのは、七仏通戒偈です。「諸悪莫作 衆善奉行 自淨其意」。過去の七仏が共通して説かれたことは、まず、始めが「諸悪莫作(もろもろの悪をなすな)」ということです。

悪をなさないということが、バラモンと呼ばれるための最低条件だということだと思えます。

次の、沙門(しゃもん)ですが、私も奥付に「ひびきのさと 沙門」と書いています。私は、一般的な使い方、広辞苑にありますように「出家して仏門に入り、道を修める人」というほどの意味で使っています。

通俗語源解釈では、沙門という語は「休息する」という語根に由来すると解せられていて、ここにありますがように「行いが静かにやすまっている」ということになるというわけです。

確かに、仏教徒が目指すニルヴァーナは涅槃寂靜と訳されますように、沙門は、行いが静かにやすまることが目指して修行に励む人だと言えます。

最後に、出家者の語源は、「おのれの汚れを除く」ということだそうです。

おのれの「汚れを除く」という言葉を聞きますと、私は、「自性清淨 客塵煩惱」を思い出します。人間は生まれるときは「こころ」が清淨(しょうじょう)なのですが、成長の過程で、こころに垢をつけて来るということです。それを、「汚れを除いて」もとの清淨にするためには、出家してこころを磨かなければならない、ということとす。こころの汚れを除くとは、自己への執着を捨てるということとす。

(三八九) バラモンを打つな。バラモンはかれ(打つ人)にたいして怒りを放つな。バラモンを打つものには禍がある。しかし(打たれて)怒る者にはさらに禍がある。

この偈は、釈尊がバラモンを目指す弟子たちに、戒めとして示された偈であるように思えます。

「弟子たちよ、打たれても怒ってはならない、打つた者には、かならず、ばちがあたって禍が及ぶが、それ以上、打つた者に怒れば、お前たちにも禍が及ぶぞ」と、諭されたのだと思うのです。打つたものに怒れば、それは単なる喧嘩になります。喧嘩は両成敗です。たとえこちらに非がなく、相手に非があつて打ってきたとしても、バラモン(修行者)は、怒ってはならないのです。

とても難しいことですが、相手が打ってきたら、どこまでも許して、頭を下げるのです。釈尊も、この難しさに、特に弟子に対して、説諭されたのだと思います。

既に出てきてた、この偈に関連した偈として次のものがあります。

(一三七、一四〇) 手むかうことなく、罪咎(つみとが)の無い人々に害を加えるならば、次に挙げる十種

の場合のうちのどれかに速やかに会おうであろう――
1 激しい痛み、2 老衰、3 身体の障害、4 重い病い、5 乱心、6 国王からの災い、7 恐ろしい告げ口、8 親族の滅亡と、9 財産の損失と、確その人の家を火が焼く。この愚かな者は、身やぶれてのち、地獄に生まれる。

(一八四) 忍耐・堪忍は最上の苦行である。ニルヴァーナは最高のものであると、もろもろのブツダは説きたまう。他人を害する人は出家者ではない。他人を悩ます人は 道の人 ではない。

(二二三) 怒らないことによつて怒りにうち勝て。善いことによつて悪いことにうち勝て。わかち合うことによつて物惜しみにうち勝て。真実によつて虚言の人によつてうち勝て。

釈尊は、怒らないことや、それに耐えることが、いかに難しいか、繰り返し説いておられます。

偈(一三七、一四〇)では、人格完成(解脱)を目指して修行する人に対して、打つ人、害を与える人は、ばちが当たるのが述べられています。これは、釈尊の実感だったのでないかと思えます。私も体験として、具体的には申しませんが、それを、多く実感しています。いま、世界中で恨みに恨みを返しています。悲しいかなです。

後記

一、寒い日が続きましたが、お風邪など引かれませんでしたでしょうか。

二、畑の方は、ほとんど休業状態です。ときどき、掘らずに残してカヤでおおっています里芋を掘るぐらいです。無農薬、有機栽培のせいか、とてもおいしく、隔日に、頂くほどです。さつま芋は、ストーブで毎日のように焼いて食べています。三十分以上かけて、じっくり焼くのがコツのようで、とても美味しく、ケーキのようです。芋といえますと、ジャガイモも味噌汁に入れて、毎日、頂いています。

三、わが子を虐待する事件が、毎日のように、起こっています。見るたびにこころが痛みます。親が愛情を薄くした結果、子どもは可愛さや従順さを失って、虐待が起こるのだと思います。

四、悲しい予測ですが、今後、虐待は増えこそすれ、減ることはないように思えます。なぜなら、日本人がますます自己を肥大させ、他己を萎縮されているからです。

五、アメリカ人の中には、民主主義ないし現代科学・文明が行き詰まっていることに気付いている人がいますが、日本では皆無のように思います。自由や自己ばかり追求する民主主義は、必然的に、他己の萎縮をもたらし、

社会を崩壊に導きます。でも、その行き詰まりを解決に導く道は、私の知るかぎりでは、アメリカ人といえども、誰も示せていません。

六、その道は、他己を回復する以外にないのです。その根幹は、自分を超えた力が自分に働いていることを畏れ、信じることです。人間の傲慢さを捨てることです。現代人は、みんな個（孤）に閉じて、人に限らず、他のあらゆる存在を手段化しています。わが子も、わが連れ合いも、わが仲間も、全ての人、全ての生き物、全ての物質を自分の快適性、利便性、享楽性の手段としているのです。自分の利益と選り好みの手段としているのです。

月刊 こころのとも 第十五巻 二月号 (通巻 一七〇号)	平成十六年二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>ぜんじょう</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと と 口座番号 016108 38660	